

審査委員会は提出された五十嵐陽介氏の学位請求論文を慎重に審査し、最終試験（公開審査）を行った結果、本学において博士（言語学）の学位を授与するのに十分な水準にあるものと全員一致で判断した。

この論文は、音韻論に立脚してイントネーションを記述する枠組みの構築を目的とし、自律分節韻律理論（AM理論）をベースとした独自の方法を示しつつ、ロシア語の平叙文と疑問文を対象としてロシア語のイントネーションを分析してみせ、その上でロシア語のイントネーションを矛盾なく記述できる新しい「イントネーション音韻論」の枠組みを構築した。斯界の先行研究を網羅的かつ批判的に検討し、従来のロシア語イントネーション研究の不備を明らかにした上で、母語話者における基本周波数の計測を柱とする実験を行い、AM理論をベースにした有効性の高い枠組みを提起したことは、ロシア語学だけでなく、一般言語学の分野においても価値を持つものである。論文は質、量ともに学位論文にふさわしい論考であると考えられる。

審査結果

本学博士後期課程に在学する五十嵐陽介氏の提出した学位請求論文「ロシア語イントネーションの音韻論」について審査委員会は論文審査と最終試験を行った結果、全員一致して博士（言語学）の学位を授与するのにふさわしい研究であるとの結論に達した。

なお審査委員会は教授中澤英彦を主査とし、富盛伸夫教授、成田節教授、匹田剛助教授、学外からは独立法人国立国語研究所研究開発部門第2領域の前川喜久雄領域長の計5名の委員及び協力者中川裕助教授で構成された。

論文の概要

ロシア語イントネーションの研究は数多くの未解決の問題を抱え、研究者の接近方法も根本的に異なっていた。そのためにイントネーションを記述するための共通の枠組みの構築が困難であった。このような状況下で本論文は、Pierrehumbert J.の博士論文(MIT, 1980)を嚆矢とし、その後現在にいたるまで発展を続けてきた音韻論的アプローチによるイントネーション研究の枠組み（自律分節韻律理論、本論文では「AM理論」と呼んでいる）を用いて、ロシア語イントネーションを分析し、必要な修正を加えて、イントネーション記述の枠組みを示したものである。以下論文の構成に沿いながら主に研究手法の面から本論文を講評する。

第1章ではイントネーションの「音韻」論とは何か、通常に分節音を対象とした音韻論との相違点は何かなど、本研究の前提となる諸問題が明解に論じられている。次にロシア語イントネーションに関する先行研究が包括的かつ客観的に概観されている。五十嵐氏は、ロシア語イントネーション研究の問題点は、ひとつには音声現象と音韻現象の峻別が十分とはいえないこと、および、定量的検証が不足していることであると指摘する。これらの問題点はいずれもAM理論が従来のイントネーション研究の問題点として指摘したものであり、氏はその記述を通じて、ロシア語イントネーション研究の現状と英語その他の言語の現状との間には、研究手法において、相当のギャップがあることを明らかにする。このギャップを埋

めることは、それ自体がロシア語イントネーション研究に対するひとつの貢献となると判断される。また、そのような貢献を、ロシア語を母語としない日本人研究者がおこなうことは、我が国のロシア語研究にとって大変意義深いことであると思われる。

第2章で、氏は前半をAM理論の解説にあてており、それは氏が当該理論を正確に理解していることを示す内容である。後半では、AM理論に則ったロシア語イントネーションの「初期枠組み」を提起した。この「初期枠組み」は英語のピッチアクセント及びフレーズトーンに関するAM理論の音韻表示を、ほぼそのままロシア語に適用したものであるが、3章以下の各章では、この「初期枠組み」を実験的手法によって批判的に検討し、最終的に第6章において本論文の結論となる「新しい枠組み」を提起することになる。

第3章では、氏は、最終ピッチアクセントに先行する発話部分に生じる上昇ピッチアクセントの音声学的性格を実験的手法で検討し、ロシア内外の先行研究 Fougeron I., Svetozarova N. D., Odé C., Yokoyama O. T., Bryzgunova E. A.における理論と比較してAM理論が相対的にもっとも現実解析力をもつものであることを示している。それと同時に、下降ピッチアクセントを構成するH(高)+L(低)というトーン連鎖とそれを担うと考えられる音節構成要素との時間関係を精密に分析した結果、HないしLのいずれかひとつが音節にリンクされ、他方はリンクされていないというAM理論の標準的な想定に疑問を投げかけている。この問題は続く数章の実験結果とあわせて、第6章でロシア語ピッチアクセントの音韻表示に対する新提案に結びつけられる。本章に報告されている実験は、トーンとストレスの時間関係に関するもっとも詳細な実験のひとつと言えるものである。

本章の実験結果は、英語におけるタイミング指定法がロシア語に関しては必ずしも妥当でないことを示唆する。これはトーンとストレス音節のリンクのあり方が、言語によってかなり異なる音声学的性格をもちうることの実例として、AM理論に新たな展望を示す発見となるとと思われる。

第4章では、真偽疑問文と疑問詞疑問文のイントネーションパターンを比較検討する。ロシア語の疑問詞疑問文には少なくとも2種類(五十嵐氏の言う「帽子型」と「頂点型」)のイントネーションパターンが用いられる。そのうちのひとつ「頂点型」は、F0(基本周波数)形状を眺めるかぎり真偽疑問文のパターンと見分けにくい、それにもかかわらずロシア語母語話者はこれらふたつを別のパターンと認識している。氏は、音響データを分析した結果、両疑問文のイントネーション間には、組織的な差異、即ちF0頂点のストレス音節に対する同期、そのF0値、F0底点の有無の違い、が存在していること、したがって、両パターンの根底には、別種の音韻表示が存在することを示した。

第5章では、ロシア語に存在すると想定される2種類の下降ピッチアクセントの心理的実在性が、imitation taskと呼ばれる実験手法を用いて検討されている。実験の結果、氏は下降イントネーションと分節音のリンク関係(時間的同期)の特徴が、ロシア語話者にとって音韻的に(離散的に)異なる判断を惹起しうることを明確に示した。

本論文の音声学的分析は、全般的に音響データの分析、すなわち音声の生成面にかかわる分析となっているが、本章では知覚プロセスを介在させた実験がおこなわれており、研究全般の信頼性を高めていると判断できる。また、imitation taskが英語以外の言語において適用されたのは本研究が最初ではないと思われる。同手法の有効性を英語以外の言語において確認した点にも本実験の価値を認めることができるだろう。

第6章で五十嵐氏は、3～5章の成果に基づき、AM理論に則ってロシア語イントネーション音韻表示の「新しい枠組み」を提示する。この枠組みにおける主要な変更点のひとつは、ロシア語イントネーションに存在する2種類の下降ピッチアクセントの本質的相違点にかかわるものである。具体的には、氏が本論第2章で提起した初期枠組みにおいては、(英語がそうであるように)H+Lという同一のトーン連鎖のいずれがストレス音節とリンクされるかの相違として位置づけられていた相違を、新しい枠組みでは、ひとつはH+Lのトーン連鎖、もうひとつは単独のHトーンとして解釈しなおし、単独のHトーンにかかわるイントネーションの下降は、ピッチアクセントHにフレーズアクセントLが後続することによって引き起こされるとみなしたのである。

もうひとつの主要な変更点は、H+Lと分節音のリンクのありかたにかかわる変更であり、五十嵐氏は、ストレス音声にリンクされるのはいずれかひとつのトーンではなく、HとLの両方であると提案する。以上の変更点を含む五十嵐氏の新しい枠組みは、本論文が対象とする範囲に関する限り、従来の研究において指摘されてきたロシア語のイントネーションパターンをすべて矛盾なく説明しうるものである。

最後の第7章では本研究の成果がまとめられ、今後の課題が指摘されている。

論文の評価

本学で課程博士号を取得するために必須と考えられる諸要件に照らして、審査委員会が本論文をどう評価したかを、順を追って述べる。

第1に、研究対象の把握と問題設定が明確になされているかどうかという点である。審査委員の1人が、博士論文執筆の典型を見たとして述べているように、この論文では、極めて明快な記述により研究目的と実験方法、今後の展望が述べられており、厳密な音声学的な手法と音韻論の知見に基づいた研究は緻密さと先駆性を備えた極めて質の高い論文であると判断される。

第2に、対象領域の先行研究を十分に渉猟し、問題設定にしたがって批判的に継承しているか否かという点である。本論文は、ロシアに限らず欧米(残念ながら日本のロシア語学においては特筆すべき研究がこれまでに存在していない)の先行研究のほとんど全てを先入観をもたず検討し、ロシア語学における定説を明確に把握した上で、それに疑問を投げかけ、自身の切り口を設定して論証を進めており、過不足のない適切な記述を行っている判断される。

第3に、研究方法、データ処理、検証、結論への論述などを含め、言語学的科学性が認められ、かつ独自のものであり、博士論文としての独創性が認められるか否かという点である。本論文で氏は読むに値する先行研究のすべてを十分に読み込んだ上で、従来の研究が母語話者の直感によるところが多く、音声の物理的特徴と抽象された言語範疇を関連付けることが少ないこと、したがって言語現実に対する解析力が乏しいことを指摘して、まずAM理論を適用した「初期枠組み」を提起した。ついでその枠組みを実験的手法により検証し、ロシア語イントネーションに相応しい「新しい枠組み」を提起し、同時に、依拠したAM理論に対する修正提案を行っている。従来のロシアにおけるロシア語イントネーションの研究では真に実験的手法を踏まえたものは皆無に等しく、本論は十分に説得的である。

第4に論文の体裁について、目次、注、参考文献などを含め論文の構成が適切であるか否

かである。この論文は全体として適切に構成されている。結論部分の第7章以外の各章の冒頭で導入の項目が設けられ、その章で対象とする概念、先行研究が過不足なく記述され、それに実験、論証が続くという構成を持っている。注記も極めて適切である。論旨の展開も読むものを納得させるものである。

第5に、自立した若手研究者としての素質と将来性が認められるか否かという点である。五十嵐氏は博士後期課程進学後2年10ヶ月で、単著論文6本、共著論文1本、国際学会発表3回（共同発表1回および投稿中の論文1本を含む）、国内学会発表10回（共同発表4回を含む）、そのほか多数の研究会発表を数える。この一事から五十嵐氏がすでに自立した研究者として活動していることは明らかである。氏は、研究の持続的遂行能力、データの処理能力、考察力および独創性に優れていると認められる。発表論文が日本語は言うまでもなく、英語、ロシア語で執筆されていることに一端が示されているが、氏は上記3ヶ国語以外にも数ヶ国語に通じ、言語習得運用能力には特筆すべきものがある。

あえて五十嵐氏の論文の問題点と思われる点を指摘する。まず、本論文はロシア語イントネーション現象の全体を解明してはいない。本論文にも述べられているように、統語構造、語用論、意味論などとの関係は一切対象とされていない。しかし、このことを本論文の欠陥とみなすことはできない。なぜならばAM理論はイントネーションの「音韻」論を標榜するものであり、音韻構造は基本的には音韻以外の言語構造とは独立に検討することが可能と考えられるからである。

ただし、ロシア語イントネーションの音韻面に限定した場合においても、本論文はイントネーションの全体像を扱いえてはいないという限界をもっている。韻律の全体構造の問題、フレーズの問題、境界トーンの問題なども考察の対象とされていない。しかし、これらは、本論文の対象・目的を超えており全体としての本論文の本質的な価値を損ねるものではない。これらの問題については、氏が「結論と今後の課題」で述べているように、イントネーションと統語論との関係の研究などを含めて、本研究の成果に基づく今後の研究の課題となろう。次に、本論文に報告された実験の一部については、被験者数が少数に限られているものがあるので、今後はより多数かつ多様な被験者を用いた追加実験をおこなう必要がある。最後に、論文記述の問題である。受身表現の多用や日本語の語法の逸脱などが散見され、誤字脱字が目立つという不備があった。これも論文の本質を決して損なうものではなく、今後の研究生活の中でおのずから是正されるものと思われる。

以上をまとめ論文全般の評価について述べる。本研究はロシア語イントネーションの研究に新生面を拓くものであり、まずロシア語のイントネーション研究にAM理論を初めて本格的に適用した研究としての価値を有するが、次にAM理論に対する修正提案を含んでいる点に一層高い価値を見出すことができる。その価値には、理論面での貢献とともに、より実用的な価値も含まれると思われる。例えば、氏が本論文で主張しているように、ピッチアクセントとストレス音節とのリンク関係に関する英語とロシア語における相違が事実であれば、そこから両言語イントネーションの対照言語学的研究、具体的にはロシア語訛りの英語や英語訛りのロシア語に関する知見をひきだすことが可能となるのである。なお、繰り返しになるが、2年10ヶ月という短期間に、これだけの成果を挙げられたことは、五十嵐氏の研究能力の高さを十分に証明している。

総じて、本論文は内容、構成ともに堅実なものであり、質、量ともに課程博士論文の水準

を十二分に上回る高い価値を有するものであると判断できる。五十嵐氏の今後の研究の展開が期待される

以上より、審査委員会は全員一致して最初に述べた結論に達した次第である。